

2020年度「コミュニケーション演習」実践報告

Report on “Communication Practice” in the academic year 2020

向後 朋美¹⁾
KOUGO Tomomi

竹之内 修²⁾
TAKENOUCHI Osamu

要旨

本稿では、2020年度「コミュニケーション演習」について科目の概要を説明した後、実施状況を報告し、今後の課題を指摘する。本科目は当初の予定を変更し、全面オンラインにて授業を実施したが、授業アンケートの回答から、80%以上の学生がリスニング力、スピーキング力、総合的な英語理解力が伸びたと自己評価していること、自由記述のコメントから、学生の自己有能感の向上の一端も観察され、オンライン授業においても、本科目のねらいがおおむね達成されたことを示す。さらに、2019年度まで実施していたCASECのデータを用いながら、短時間であっても英語に毎日触れることが高得点層の「聞くこと」を中心とした英語の運用能力の向上に役立っていることを示す。

1. はじめに

十文字学園女子大学では、2020年度の改組に伴い1年次の全学共通必修科目として「コミュニケーション演習」を新設した。本科目は、(i) 英語の母語話者とのオールイングリッシュでの授業を通して、英語に対する苦手意識を克服し、社会で存分に能力を発揮するため、音声を中心とした英語の基礎的な運用能力を身につけること、(ii) グループワークの実施やプレゼンテーションを通して、言語による交渉能力や協調性を養い、大学4年間の学習全般に対する意欲・自己有能感を向上させること、を目標としている。

本稿では、実施初年度の本科目の実施報告を行う。まず第2節で本科目の概要を説明する。次に3節で実施状況を報告・総括するとともに、運営面における今後の課題を示す。最後に4節では、社会情報デザイン学部で2020年度に実施したCASECのデータを用いながら、短時間でも英語を毎日聞き、発話する授業が英語の運用能力にどのような影響をもたらすのかについて若干の考察を加える。¹⁾

¹⁾ 十文字学園女子大学 教育人文学部 児童教育学科

Department of Elementary Education, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学 社会情報デザイン学部 社会情報デザイン学科

Department of Social and Information Design, Faculty of Social and Information Design, Jumonji University

2. 科目の概要

「コミュニケーション演習」は、本学教員が授業内容の選定、科目の管理・運営の統括、成績評価を行い、その授業を株式会社ウエストゲイト（以下、WG）に委託して実施している。2節では本学シラバスとWGが作成した報告資料をもとに、本科目のねらい、授業内容、授業形態、評価方法、登録方法について概観する。

2.1. ねらいと授業内容

（１）は1節で述べた目標をさらに具体的に示したものである。

- （１） a. 英語に対する苦手意識を克服することができる（楽しみながら英語を使うことに慣れることができる）。
- b. 身の回りの事象をセンテンスレベルで表現できる。
- c. 個々の発音・アクセント・イントネーションを聞き分け、単語・句レベルで英語らしい発音を身につけることができる。
- d. 基礎的なプレゼンテーション技術を学び、人前で話す自信を身につけることができる。

Helgesen, Brown, and Wiltshier (2017), *English Firsthand Access 5th Edition* (2017) をテキストとして使用し、授業はすべて英語で行い、（１）を達成することを目指す。

授業で毎日扱う内容はレッスンカレンダーの形で定められている。その内容は表1に示したように、主に日常の様々な場面や発話の機能に焦点を当てて組み立てられており、適宜文法に関する事項・音声に関する事項が加えられている。また、「話すこと（やり取り）」の他に、学期末にはプレゼンテーション（＝「話すこと（発表）」）の原稿を作成する課題もあり、わずかなではあるが「書くこと」の要素も含まれている。

2.2. 授業形態

2.2.1. 当初の計画

「コミュニケーション演習」は半期1単位の全学必修科目である。前期は教育人文学部の4学科と社

表1 授業で扱う内容

トピック・場面別	初対面での挨拶、教室英語、指示に従う、指示を与える、所有物について話す、部屋について話す、日々の活動について話す、人物を描写する、性格や性質を描写する、余暇活動を描写する、頻度と習慣について話す、週末の活動について話す、食品を描写する、数や量についてたずねる、食習慣について話す、日本のものを描写する、屋内のものを描写する、位置についてたずねる、家を描写する、過去形の復習、過去の出来事について話す、週末の活動を描写する、スポーツやエクササイズに関する語彙、アクティビティを描写する、好きな活動について話す、未来を表す表現、将来の夢について話す
文法項目	Wh疑問文、Yes-no疑問文、現在時制、命令文、there構文、不定代名詞、頻度の副詞、可算名詞・不可算名詞、現在進行形、前置詞、過去時制、未来時制
音声項目	音節、強勢の位置、RとLの区別、カタカナ語の発音、VとBの区別、子音で終わる単語の発音

(WG2020年度レッスンカレンダー・Helgesen, Brown, and Wiltshier (2017) より筆者が再構成)

会情報デザイン学部 の 1 学科、後期は人間生活学部 の 4 学科の 1 年生が履修する。本科目の最大の特徴は、40分 1 コマの授業を月曜日から金曜日までの週 5 回、合計60回実施するという授業形態である。通常の授業は90分 1 コマの授業を週 1 回合計15回実施するが、向後（2020）でも指摘した通り、外国語学習の場合は週 1 回の授業よりも、短い時間であっても毎日学習することで学習効果が高まることが期待される。

なお、社会情報デザイン学部には、前期の「コミュニケーション演習」に引き続き、学科専門必修科目として同様の形態の「英語コミュニケーション応用」があり、1 年生は通年で週 5 回英語母語話者の授業を受講する。²⁾ このことによる英語の運用能力への効果については3.3節と 4 節で考察する。

前期は2020年 4 月20日～7 月16日、後期は 9 月23日～12月17日の各60回を予定した。1 人当たりの発話回数・時間をできる限り確保し、音声を中心とした英語の基礎的な運用能力を身につけるという目標を達成するために、1 クラスは10～15人程度の規模を想定した。

授業は、語学教育ワーキンググループ所属である筆者 2 名が統括者となり、本学園が業務委託した WG の本学担当日本人スタッフ 3 名、教務課、情報処理室、施設課のサポートのもとに運営された。³⁾ 担当講師は WG から派遣された英語を母語とする 7 名で、2～10年の英語の指導経験がある。イギリス英語（BrE）の母語話者が 5 名、アメリカ英語（AmE）の母語話者が 2 名で、このうち、5 名（BrE4名・AmE1名）が前期に教育人文学部、後期に人間生活学部を、2 名（BrE1名・AmE1名）が社会情報デザイン学部を担当することとした。

2.2.2. 授業形態等の変更

2019年冬期以降の Covid-19 の感染拡大と2020年 4 月 7 日に埼玉県に発令された緊急事態宣言を受けて本学では前期のすべての授業がオンラインで実施されることになり、本科目も実施形態と授業回数を変更する必要性が生じた。複数の実施形態を検討した結果、1 コマ40分をさらに 2 分割した 1 コマ20分の授業とし、授業形態は（2）に示したように変更した。

- （2） a. 授業前：20分程度の予習動画をオンデマンドにて視聴
- b. 授 業：20分の Zoom によるオンライン授業
- c. 授業後：マイクロソフト Forms（以下、Forms）による復習課題提出

授業を当初の計画の40分ではなく20分としたのは、1 クラスをさらに 2 分割することで学生の発話の機会を確保するためである。講師による説明を事前にオンデマンドで配信し、授業前に予習として学生に視聴してもらうことで、実際の授業での発話の時間を確保した。授業後には出席確認も兼ねた復習課題を Forms で提出してもらうことにした。出席の確認方法の詳細については3.2.1節で触れる。

全面遠隔授業の準備のため授業開始時期を 4 月20日から 5 月 7 日に繰り下げ、授業回数は全51回とした。また、これに合わせて後期の授業期間も変更し、9 月30日～12月15日とした。

後期は、全学で学籍番号の奇数・偶数により登校週を決め、オンライン受講者と教室受講者が同時に受講するハイフレックス型の授業形態となった。しかし、本科目は授業の性格上ハイフレックスでは効果的な授業の実施が困難と判断し、自宅受講者・教室受講者ともに前期同様（2）に示した方法で Zoom によるオンライン授業を継続することとした。

後期の教室受講者は原則として 7 つの英語教室を利用した。当初 1 教室あたり15人を収容する予定で

表2 「コミュニケーション演習」の時間割枠

本学時間割枠（各90分）		「コミュニケーション演習」各20分			
		前半		後半	
1 限	9:00～10:30	なし		なし	
		1-1	09:50-10:10	1-2	10:10-10:30
2 限	10:40～12:10	2-1	10:40-11:00	2-2	11:00-11:20
		3-1	11:30-11:50	3-2	11:50-12:10
昼休み	12:10～13:00	4-1	12:15-12:35	4-2	12:35-12:55
3 限	13:00～14:30	5-1	13:00-13:20	5-2	13:20-13:40
		6-1	13:50-14:10	6-2	14:10-14:30
4 限	14:40～16:10	7-1	14:40-15:00	7-2	15:00-15:20
		8-1	15:30-15:50	8-2	15:50-16:10
5 限	16:20～17:50	9-1	16:20-16:40	9-2	16:40-17:00
		10-1	17:10-17:30	10-2	17:30-17:50
6 限	18:00～19:30	11-1	18:00-18:20	11-2	18:20-18:40

あったが、感染防止を考慮し、1教室最大8人までとした。さらに、授業コマ数増、時間割調整や換気機能設備の追加設置などの追加対応をとり、感染防止に努めた。

授業時間帯は表2に示した通り、昼休みの12:15～12:55を含む9:50～18:40までを、1コマ20分、22コマに分け、講師はこのうちの12～14コマを担当した。クラスは時間割登録時に行うレベルチェックテストにより、前期の教育人文学部は5レベル（つまり、5クラス編成）、社会情報デザイン学部は2レベル、後期の人間生活学部は5レベルに分け、学期を通じて1つのレベルを1人の講師が担当した。⁴⁾

授業の出席方法は前期と後期で異なる。前期は前半20分と後半20分の名簿を固定せず、先着順にZoomに入室できた学生から上限人数までを受け入れ、残りの学生は後半の授業に出席するという方法を取った。後期は前半と後半で名簿を固定し、指定された時間帯で授業に出席する方法を取った。

2.3. 評価方法

科目の評価は、英語運用能力（30%）、プレゼンテーション（10%）、授業への参加態度（60%）とし、総合評価60点以上を合格とする。各項目は表3の評価規準に基づいて評価される。

表3の「a. 英会話能力」は、講師が学期末に評価を出すWCALD（Westgate Communicative Ability Level Description）の結果を基に算出される。WCALDは低い方から順にPB（Pre Beginner）-1L（Low）-1M（Middle）-1H（High）-・・・6Hまでの19段階に分けられている。本科目の到達目標を前期1Hレベルとし、到達目標レベルから1つレベルが下がるごとに満点の30点から3ポイントずつ減点する方式でWCALDの得点は算出される。WCALDは、オンライン授業に原則10回以上出席しなければ算出されない。

「b. プレゼンテーション」は、学期末に紹介したい自分の持ち物をクラスに示し、それについて3つの項目に分けて説明するshow & tell方式で行う。学生は原稿を準備し、講師の添削を受けたのちに実際のプレゼンテーションを行う。クラスでのプレゼンテーションは5つの評価規準に基づいて3段階で評価・点数化される。

「c. 授業への参加態度」は4の評価規準に基づいて5段階で評価・点数化される。

表3 評価項目と評価規準

評価項目と割合	評価規準
a. 英語運用能力 (30%) (1H レベル)	理解力・発音・文法の正確さ・流暢さなどの総合的オーラルコミュニケーション能力 ①簡単な単語を使った短い文や質問をゆっくり話してもらった場合、理解することができる。②いくつかの丸暗記したフレーズ（句）や文を使うことができる。③センテンス（文）を作る努力をするが、通常、一単語や短いフレーズ（句）を使って、単純な質問をしたり、応答をすることができる。④日常よく用いられる動作を表す単語、時間を表す単語、単純な説明などを理解することができる。
b. プレゼンテーション (10%)	文章の構成力や内容・発表態度等 ①Introduction, body, conclusion が明確である。適切な文法や語彙が使われている。②大きく明瞭な声で話す。聞こえやすい。練習している。③ただ読むだけではなく聴衆に視線を向けている。自信を持って発表している。④よく準備されて興味深い。プレゼンテーションの目的を達成している。⑤他の学生によるプレゼンテーションに良く注意を払っている。質問をする。
c. 授業への参加態度 (60%)	クラス内活動への自主的参加度・日本語に頼らず英語を積極的に使う態度・与えられたタスクや宿題への積極的取り組み等 ①積極的、かつ協力的にアクティビティに参加する。②講師の指示に注意を払い、それに迅速に従う。③英語を使うことに積極的で、日本語に頼らない。④与えられたタスクや宿題に期日を守って取り組む。

2.4. 登録方法

学生は、本学の登録システムLiveCampusと「コミュニケーション演習」専用サイトCampus Englishの2か所で本科目を登録する必要がある。Campus Englishでの登録はLiveCampusでの登録より先に行われ、時間割確定後に学科必修科目と重複してしまった学生には時間割の変更が認められる。

3. 実施状況

3節では登録状況、出席状況、総合点、学期末学生アンケート結果について順に概観したのち、本科目の運営を総括し、今後の課題を示す。

3.1. 登録状況

前期は教育人文学部516名、社会情報デザイン学部173名、合計689名が、後期は人間生活学部360名、社会情報デザイン学部173名、合計533名が、毎日各自の空き時間で受講できる時間帯をCampus Englishを使い登録した。1クラスの人数は、教育人文学部が5～10名、社会情報デザイン学部が4～10名、人間生活学部が2～10名であった。

3.2. 出席状況

3.2.1. 出席確認方法

2020年度前期と後期では異なる方法で出席を確認した。20分という短い授業時間の中で点呼やチャットでは講師が出席者を正確に把握することが難しいという理由から、前期は記録と管理が行いやすいFormsを使用して出席管理の補完を行った。しかしながら、一部の学生がFormsの提出のみで出席点が与えられると誤解し、授業への取り組みがおろそかになった形跡が認められた。中にはFormsは提出しているもののオンライン授業への参加が不十分なことにより単位不認定となる学生も出た。このた

め、後期は前期の方法を改め、授業の前半・後半の名簿を固定し、授業中の点呼により出席確認を行った。

3.2.2. 前期・後期別出席率

各期の出席率を66%未満、66～79%、80～89%、90～100%の4つに分け、それぞれの割合を示したものが図1である。出席率の平均は、前期履修学部である教育人文学部が92%、社会情報デザイン学部が91%で、出席率90%以上の学生が約8割であった。後期履修学部である人間生活学部は89%で、出席率が90%以上の学生が約5割であった。

3.3. 総合点・WCALDレベル

各学期の総合点を90～100点、80～89点、60～79点、59点以下の4つに分け、それぞれの割合を示したものが図2である。総合得点の平均点は、教育人文学部が79.0点、社会情報デザイン学部が76.2点、人間生活学部が85.6点で、80点以上の割合はそれぞれ、70%、59%、81%である。単位不認定者数は、順に5.2%（33人/517人）、1.7%（9人/174人）、1.1%（4人/360人）である。3.2.1節で指摘した通り、前期はFormsの提出を出席点と誤解し、授業への取り組みがやや疎かになった学生がいたと考えられる。後期は出席確認方法を授業中の点呼に改善したため、上述のような学生も減り、後期の不認定者数は大きく減少した。

次に、各学部の総合点の一部となっているWCALDレベルの割合を示したものが図3である。⁵⁾ 2.3節で述べたように、本科目の到達目標は1Hレベルである。教育人文学部の65%、社会情報デザイン学部の58%、人間生活学部の71%が1Hレベル以上の評価を受けており、3学部ともに半数以上の学生が到達目標に達していることがわかる。⁶⁾

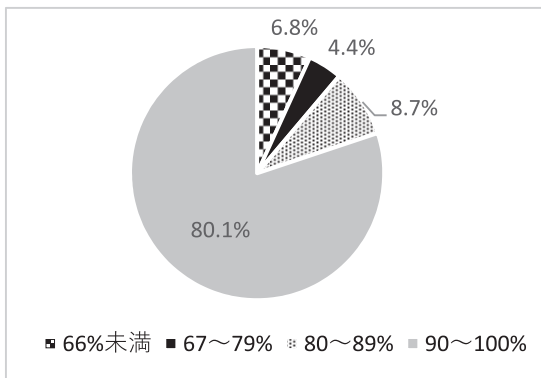


図 1 - 1 前期出席率割合

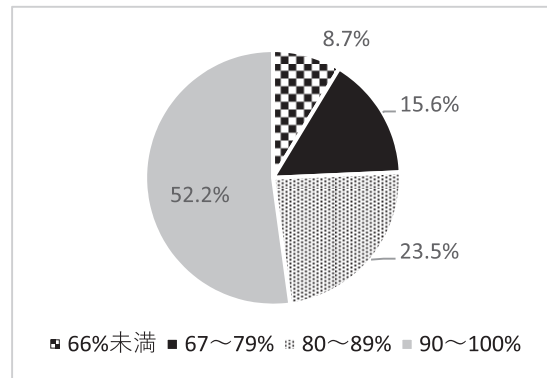


図 1 - 2 後期出席率割合

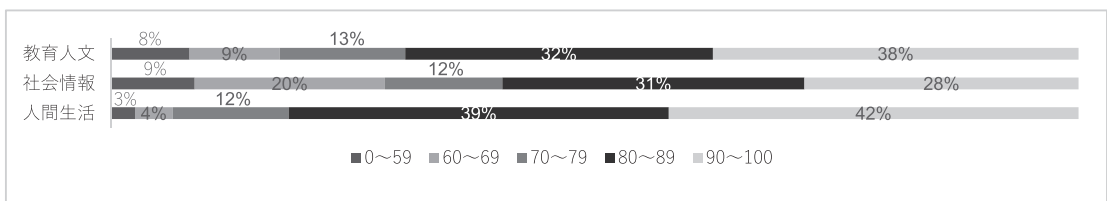


図 2 学科別総合得点分布

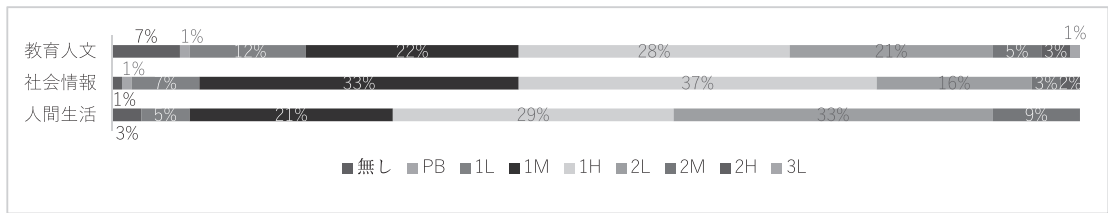


図3 学部別WCALEDレベルの割合

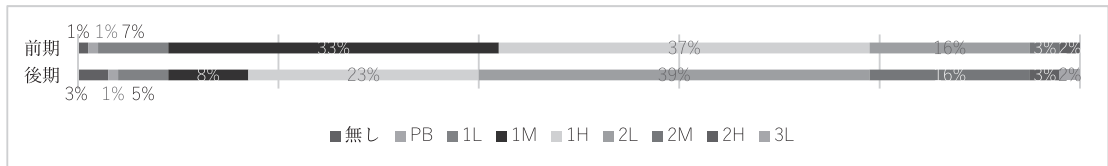


図4 社会情報デザイン学部WCALEDレベルの割合

最後に、後期も同様の形式の授業が必修であった社会情報学部のWCALEDレベルを前期のものと比較し、その変化について触れておく。前期・後期末のWCALEDレベルの割合を示したものが図4である。図4から、1Hレベル以上の評価を受けた学生の割合は、前期末の58%から後期末の83%に上がり、後期の目標である2Lレベル以上の学生の割合も21%からおよそ3倍の60%に上がっていることがわかる。このことから年間を通して英語を毎日聞き、話すことで音声を中心とした英語の基礎的な運用能力が伸びることが示唆される。

3.4. 学生アンケート結果

3.4節では、WGが独自に実施しているアンケートの結果の一部を報告する。⁷⁾ アンケートはFormsを利用して無記名方式にて実施された。質問項目は、学生の自己評価、授業・講師の満足度、遠隔授業の感想などを問う部分と自由記述からなり、自由記述と遠隔授業の感想以外は、各質問に「そう思う」「ある程度そう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階で回答する方式である。回収数は前期429名（回収率62%）、後期430名（75%）であった。以下ではアンケート結果のうち、学生の自己評価、遠隔授業の感想、授業に満足できなかった点、自由記述について順に取り上げ、若干の考察を加える。

前期の質問項目のうち、表4の8つの質問に関する結果を示したものが図5である。⁸⁾ 授業全体の満足度を問う質問5に対し、「そう思う」「ある程度そう思う」の合計が90%以上であることから分かるように、この授業の満足度は高い。また、学生の自己評価を問う質問1～4のいずれに対しても、約80%の学生が「そう思う」「ある程度そう思う」と回答しており、リスニング・スピーキングを含め、総合的に英語力が伸び、また英語が好きになったと自己評価している。質問9の担当講師への満足度も98%という非常に高い数値を示し、これが授業全体の満足度につながっていると推測される。質問10、11の回答からは、約80%の学生が本授業が実生活や大学での勉強に役立つと感じていることがわかり、授業内容が学生のニーズに合っていたことを示している。以上のことから、1節で示した本科目の2つの目標がおおむね達成されたと言える。

遠隔授業に関する感想は選択肢から複数選ぶ回答方式で行い、その結果を回答率が高い順に示したも

表 4 2020年度前期期末アンケート質問項目

自己評価	質問 1	受講前に比べ、英語が好きになった。
	質問 2	受講前に比べ、リスニング力が伸びたと思う。
	質問 3	受講前に比べ、スピーキング力が伸びたと思う。
	質問 4	受講前に比べ、総合的に英語理解力が伸びたと思う。
満足度	質問 5	全体として、講座に満足している。
講 師	質問 9	全体として、担当講師に満足している。
ニーズ	質問10	趣味、旅行、生活において授業で学んだことを活かせると思う。
	質問11	大学の授業、留学、テスト、就職活動において授業で学んだことを活かせると思う。

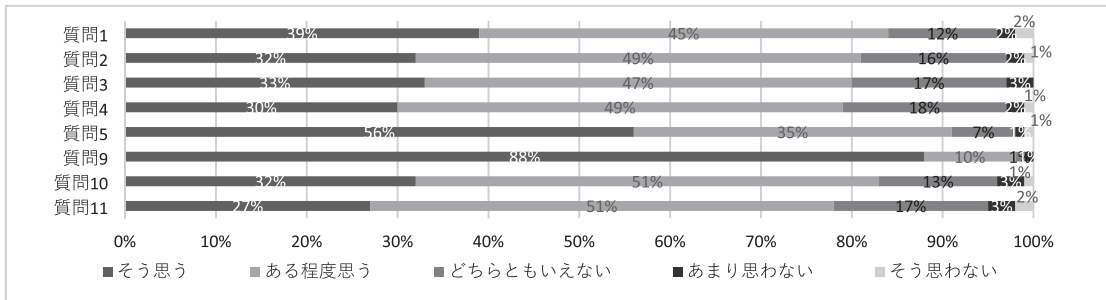


図 5 2020年度前期期末アンケート結果

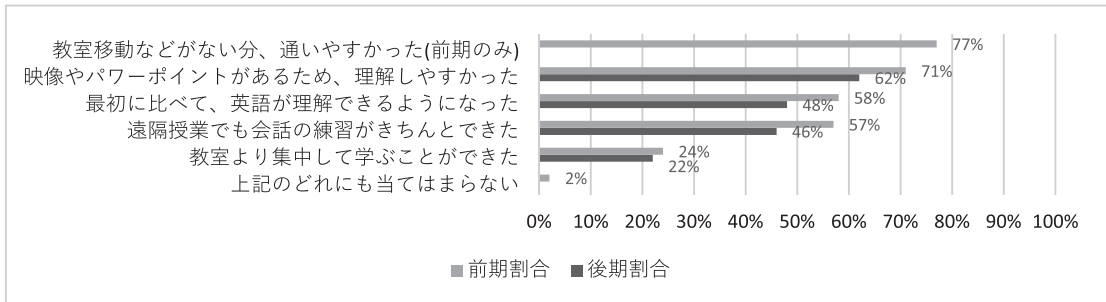


図 6 遠隔授業の感想 (複数回答可)

のが図 6 である。⁹⁾ 前期のみの選択肢ではあるが、遠隔授業は対面授業より出席しやすいという回答が 77% で最も多い。一方、「教室より集中して学ぶことができた」を選択した学生の割合は前期・後期ともに約 20% であることから、遠隔授業は対面授業ほど集中できない傾向であることが分かる。遠隔授業は対面授業よりも出席しやすいが集中できない傾向になることは、筆者が担当する授業でも実感するところであり、遠隔授業の一般的な傾向であると推測される。

遠隔授業については、後期でさらに満足度に関する質問を追加した。遠隔授業の満足度は、「とても満足」から「満足でない」の 5 段階から選んでもらい 5 点法で評価したところ、平均点は 4.23 点で、ほとんどの学生が遠隔授業に満足していることが分かった。さらに、このうち「満足でない」と回答した学生には、その理由を 5 つの選択肢から選んでもらった。その結果を示したものが図 7 である。図 7 が

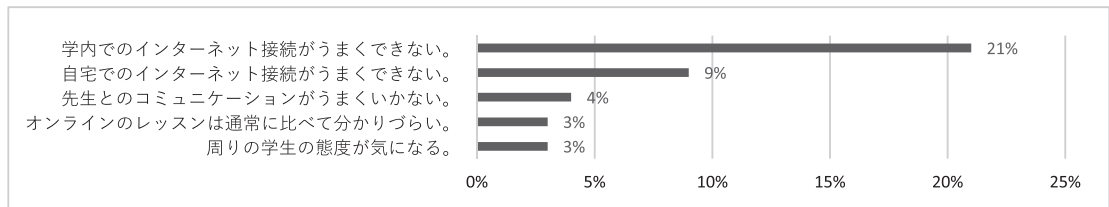


図7 オンライン授業が「満足でない」理由の割合（複数回答可）

表5 自由記述のコメント

質問項目	
印象に残る授業	様々なミニゲーム、クイズ、発音練習、ペアワーク、ブレイクアウトセッション、プレゼンテーション、グループ対抗のゲーム、季節のイベントに関する授業
講座・講師の良かった点	講師の先生の明るい性格と励まし、予習復習に使えるオンデマンド動画、毎日授業があることで英語に慣れた、基礎的なレベルからのスタートで理解しやすかった、少人数で集中できる
講座・講師の改善点	不安定なネット接続、専用教室の外の声が気になる、授業時間（前半か後半か）がわかりづらい、English onlyで難しい、フリートークの時間が欲しい、休憩時間が短いので移動が大変

示すようにインターネット（以下、ネット）の接続の問題が最も多い。自由記述欄にもネット接続のトラブルに関するコメントは数多く見られ、実際、学期中の学生の問い合わせやトラブルの原因の大半がネット接続に関するものであった。英語教室のある建物の1階、2階の各階に最大30台のネット接続が可能な環境を整備してあったものの、ネット接続に関するトラブルは学期を通じて発生した。

トラブルの原因としては、(i) 学生の使用する機器が様々であり、端末やアプリのバージョンが古い、(ii) ZOOMを利用し、常時ビデオ（顔出し）とマイク（音声）をONにするため、回線に負荷がかかりやすい、(iii) 授業中に、ブレイクアウトセッション（任意のペアワーク）を頻繁に取り入れているため、画面切り替え時に通信トラブルが発生しやすい、という3点が考えられる。学生からの問い合わせには、ネットにある程度の不安定な側面があることを説明し、再起動、再接続や端末の交換等のアドバイスをすることで対応した。

自由記述のうち、印象に残っている授業、講座・講師のよかった点と改善点について代表的なコメントの内容をまとめたものが表5である。本科目と担当講師に対する満足度が高いことは上述したが、自由記述からも各講師の明るく、優しい人柄に加え、楽しい雰囲気での授業運営が主要因であることがうかがえる。英語に苦手意識を持つ学生も講師の熱心な励ましにより、意欲を失うことなく学習を続けられたと考えられる。

3.5. 2020年度の総括と今後の課題

3.5節では、当初の予定の対面授業から遠隔授業へと変わったことを踏まえ、今年度の運営に関する総括をし、今後の課題を述べる。

オンライン授業元年ということもあり、3.4節でも指摘した通り、前期は操作ミスや接続不良などのネット環境に関するトラブルが散見された。後期になるとその種のトラブルはかなり減少した。学生がオンライン授業に慣れてきたためであると推測されるが、本科目は毎年新入生が受講することを考える

と、これからも前期は多少の混乱が発生することが予測される。

今後の運営上の課題は教室の確保とWi-Fi環境のさらなる整備である。2022年度から本科目を全面的に対面授業で実施する場合は、1教室最大15人程度を収容する必要があるが、感染状況によってはそれが困難である可能性が高いため、使用教室をさらに増やす必要がある。ハイフレックス型で実施する場合も配当の英語教室では物理的に学生を収容しきれないため、最大50人程度の学生を収容でき、かつ一斉のWi-Fi接続が可能な環境が必要となる。

通常登校下において本科目のみオンラインで授業を実施する場合は、安定したネット環境が必要となる。本科目はビデオとマイクをONにする必要があり、また、全員が学内からネットに接続するためである。学生のアンケートにおいても、学内の接続トラブルに関する苦情は少なくない。端末の仕様など学生側にその原因がある事例も多いと思われるが、Wi-Fi環境のさらなる改善が望まれる。

4. CASEC得点による考察

3.3節では担当講師によるWCALDレベル評価の結果を概観し、学期末には60～70%の学生が1Hレベルに到達したと講師が評価していることを示した。また、社会情報デザイン学部では前期に引き続き後期も週5回英語母語話者の授業を毎日受講することにより、2Lレベル以上の学生が約3倍に増え、着実にレベルを上げていることを指摘した。

4節では、社会情報デザイン学部において入学時と1年次年度末の2回実施した「コンピュータを使用した英語コミュニケーション能力判定テスト(Computerized Assessment System for English Communication)」(以下、CASEC)の得点を用い、上述の担当講師の評価とは別の角度から本科目の効果について検証する。

CASECは受験者の解答の正解・不正解に合わせて次に提示される問題の難易度が変更される適応型テストである。問題は(i)語彙、(ii)表現・用法、(iii)リスニングによる大意把握、(iv)ディクテーションの4つのセクションから構成され、問題形式は(i)～(iii)が4択、(iv)が書き取りで、各セクション250点満点である。文法的能力と「聞くこと」に重点が置かれ、「書くこと」の要素が若干加えられたテストであり、2.2節(1)に示した「コミュニケーション演習」の目標の一部を測定できると考えられる。

本学では、2016・2017年度を除く2008年度～2019年度までの10年間、入学時にCASECを実施し、さらに2008～2013年度までの6年間は入学時に加えて1年次学期末にアチーブメントテストとしても実施していた。¹⁰⁾2020年度からは教員作成のプレイスメントテストを使用することになったため、社会情報デザイン学部を除き、全学でのCASECの使用は終了した。そのため、本稿ではCASECの得点を用いて全学の「コミュニケーション演習」について検証することはできない。そこで、入学時と年度末にCASECを実施することができた社会情報デザイン学部のデータを用い、2019年度までのデータと比較しながら、短時間であっても英語による英語の授業を毎日受けることの効果について考察を行う。

2.2.1節で述べた通り、社会情報デザイン学部の学生は、前期に引き続き後期も週5回英語母語話者の授業を履修している。そのため、厳密には半期の「コミュニケーション演習」ではなく、後期の「英語コミュニケーション応用」を含めた1年間の授業の成果がどのようにCASECの結果に反映されているかを検証することになる。

社会情報デザイン学部の受験者数は以下のとおりである。入学後の2020年4月8日～15日の間に入学

者173名中64.7%にあたる112名がCASECを受験した。年度末は、後期の授業が終了した1月6日～29日の間に全体の34.1%にあたる59名が受験し、入学時と年度末の2回受験した学生は、全体の24.3%にあたる42名であった。¹¹⁾

以下では、2回受験者42名の入学時と年度末の結果について次の3つの点から考察を行う。はじめに、2019年度「学内留学—毎日英会話I・II」のデータも参考にしつつ、各セクションと合計得点の比較を行う。次に得点帯ごとの人数分布を比較する。最後に2008～2019年度の平均点との比較を行う。

図8-1は2回受験者の入学時と年度末の2回の得点を各セクション・合計で比較したものである。参考までに「コミュニケーション演習」に先立って同様の授業形態で2019年度に実施された「学内留学—毎日英会話I・II」の比較を図8-2に示す（向後（2020）参照）。

各セクションの入学時と年度末の平均点を比較すると、2020年度はいずれのセクションも年度末が入学時を上回っている。特に、セクション4（ディクテーション）で15点近く平均点が上がっており、リスニング力が伸びていることがうかがえる。合計点の入学時と年度末の平均点はそれぞれ378.4点と401.7点で23.3点上がり、2019年度の伸びを上回っている。短時間でも英語を毎日聞き、発話する授業には、英語の運用能力の1つであるリスニング力をのばす効果があることが推測される。2019年度と2020年度では母数も対象者も異なるので一概には結論づけられないが、2020年度より2019年度の平均点の伸びが小さい理由としては、向後（2020）でも指摘したとおり、高得点層ほど平均点が伸びにくいことが挙げられよう。

得点帯ごとの人数分布は図9に示したとおりである。入学時は300点から400点までの範囲（実線矢印部分）に全体の約5割が入っているが、年度末には375～475点の範囲（破線矢印部分）に全体の約5割が入っている。ここからも、受講者の英語の運用能力は1年間で底上げされていることが分かる。

図10は向後（2020）で作成したCASECの平均点に関する図に2020年度の社会情報デザイン学部データを加えたものである。2008～2013年度まではCASECを入学時（黒色部分）と1年次年度末（灰色部分）に2回実施していたため、年度内の平均点の変化がわかる。2014年度以降は実施が入学時1回になったため、入学時の全学平均点のみが図示されている。さらに、2008～2010年度までは必修の英語が週2回の学部（以下、週2回学部）と週1回の学部（以下、週1回学部）があったため、全学の平均

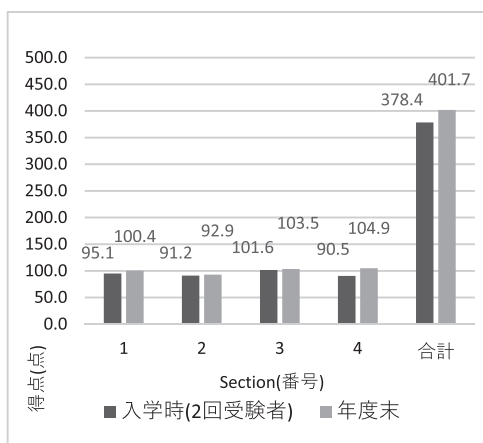


図8-1 2020年度2回受験者平均点比較（母数42）

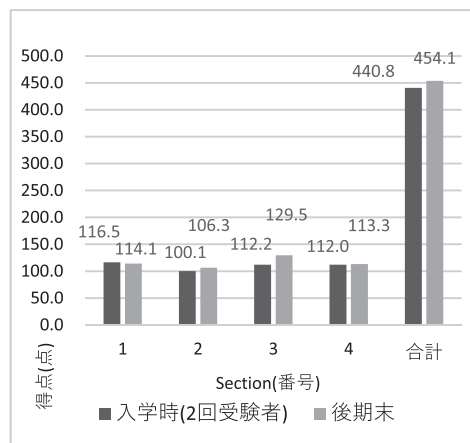


図8-2 2019年度2回受験者平均点比較（母数15）

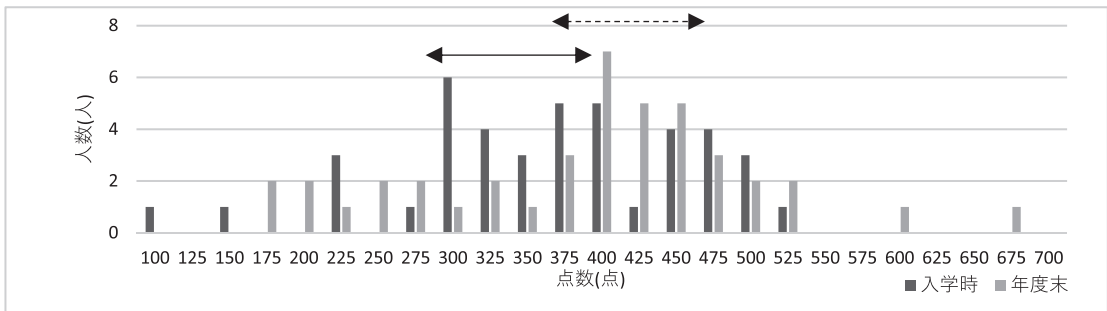
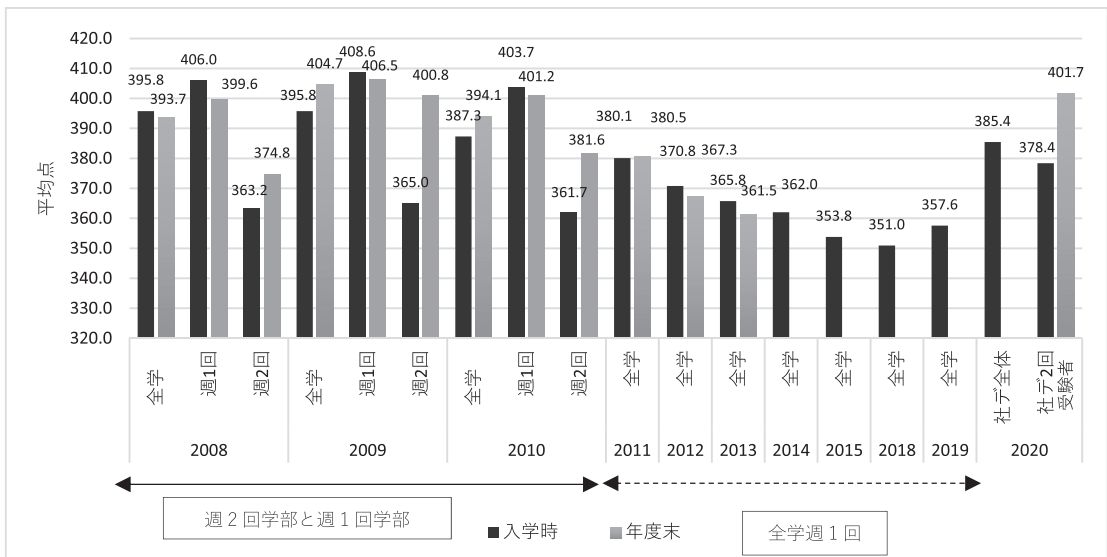


図9 得点別人数比較



(向後(2020:204)図6にデータラベルと2020年度データを加筆)

図10 CASEC平均点年度内・経年変化

点の他に学部ごとの平均点を濃い灰色と薄い灰色のパターン部分で示した(実線両矢印の範囲)。2011～2013年度までは全学で英語の授業が週1回となった(点線両矢印の範囲)ため、年度内の比較のみが図示されている。2020年度の部分は今回新しく加えたものである。

ここで注目したいのは、2020年度社会情報デザイン学部2回受験者(以下、①)と2008～2010年度の週2回学部受験者・2011～2013年度受験者(以下、②)の平均点である。②の入学時の平均点はおおよそ360～410点であるが、いずれの場合も年度末の平均点は入学時とはほぼ同じか、入学時より低くなっている。一方で、①の入学時の平均点は入学時の378.4点から23.3点上がり、年度末には401.7点となっている。向後(2020)などで繰り返し指摘してきたことであるが、週1回の英語の授業ではせいぜい入学時の英語力を維持することしかできないことに比べ、①では平均点が20点以上上がっており、1年間の授業の効果を示している。さらに、これまで週2回学部の入学時平均点が360点台だったのに対し、①は370点台後半という、比較的高い得点であっても平均点が伸びていることも、1年間の授業の効果を示していると考えられ、高得点層であっても平均点の低下が食い止められているという向後(2020)で指

摘した点を支持するものである。

以上、4.2節ではCASECの得点を3つの視点から検討し、担当講師の評価のみならずCASECの得点からも、短時間であっても英語に毎日触れることが英語の運用能力の向上に効果をもたらすことを示した。

5. おわりに

本稿では、2020年度「コミュニケーション演習」の概要を説明した後、実施状況を報告した。また、授業アンケートの回答から、80%以上の学生がリスニング力、スピーキング力、総合的な英語理解力が伸びたと自己評価していること、自由記述のコメントから、学生の自己有能感の向上の一端も観察され、オンライン授業においても1節で示した本科目の2つのねらいがおおむね達成されたことを示した。さらに、2019年度まで実施していたCASECのデータを用いながら、短時間であっても英語に毎日触れることが高得点層の「聞くこと」を中心とした英語の運用能力の向上に役立っていることを示唆した。

《注》

- 1) 1、2、4、5節は向後が、3節は竹之内が執筆を担当した。
- 2) 授業内容以外に単位数・授業時間数・到達目標が「コミュニケーション演習」とは異なる。単位数は2単位で、1回の授業は45分となる。評価方法は「コミュニケーション演習」と同様の割合で点数化されるが、WCALD(2.3節参照)の到達目標は2Lレベルである。
- 3) 時間割組・時間割変更への対応・パソコンやネットの不具合への対応・講師への連絡などはWGの堀野圭太氏、沓澤実紗子氏、瀧田哲也氏が担当した。新しい形態の科目であることに加え、Covid-19対応など不測の事態が多くあった中、大過なく初年度の実施を終えられたのは、三氏の的確かつこまやかなサポートと教務課・情報処理室・施設課ほか、学内各部署のバックアップによるところが大きく、ここに心より御礼申し上げる。
- 4) 授業に加えてEnglish Challenge(以下、EC)と称する時間帯を1日につき1コマ(40分)設け、講師と自由に話せる時間を設ける予定であったが、前期は履修者数が多かったためECを設定することができず、後期のみの設定となった。
- 5) 図4凡例の「なし」は、2.3節で説明したように出席が10回未満であったためにWCALDが算出されなかった学生を指す。
- 6) 学期末に1Hレベル以上の評価を受けた学生の割合が3学部のうち最も高かったのは人間生活学部である。この点については分析するための材料が少ないため推測の域を出ないが、後期受講の学生は、前期の授業を通してオンラインの授業形態や機器の操作等に習熟し、通信関係のトラブルを避けることができたため、比較的落ち着いて受講できた、という要因が考えられる。入学時の英語力がすでに高かったという要因も考えられるが、入学時に「英語I」のプレースメントテストとして受験してもらった英語の基礎学力確認テスト(100点満点)の平均点を比較すると、教育人文35.9点、社会情報デザイン41.0点、人間生活38.1点であり、人間生活学部生の英語力が他学部生よりも有意に高かったとまでは言えない。この点についてはさらなる調査と分析が必要である。
- 7) アンケート結果はすべて学内の「教育研究」フォルダに保存されているので、詳細については参照されたい。

- 8) 後期アンケートの結果については結果が前期とほぼ同じだったため、割愛する。
- 9) 後期のアンケートに「教師移動がない分、通いやすかった」という選択肢が入っていないのは、2.2.2節で述べたように、学生は後期は隔週で登校していたためである。
- 10) 2019年度までの報告と考察は向後ほか（2009, 2010, 2011, 2012）、設楽ほか（2013, 2015, 2016）、向後（2020）で詳しく扱っている。
- 11) 「英語I」のプレイスメントテストとしては教員作成のテストを用いたため、学部入学者全員にCASECの受験をメールで呼びかけたものの、受験者の割合は7割に満たなかった。また、年度末のCASECの受験も学科全員に呼びかけたものの非常に低い受験率となった。プレイスメントや成績評価に関わらない、すなわち、学生にとってインセンティブのない実力試験を受験してもらうことは容易ではない。

《参考文献》

- Helgesen, Brown, and Wiltshier (2017), *English Firsthand Access 5th Edition Access*, Pearson.
- 向後朋美 (2020) 「2019年度「学内留学－毎日英会話I・II」実施報告」, 『十文字学園女子大学紀要』第51集, 195-208, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・森美榮・設楽優子 (2009) 「2008年度CASEC結果報告と共通英語教育」, 『社会情報学論叢』第13号, 141-165, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子 (2010) 「2009年度CASEC結果報告と共通英語教育」, 『社会情報学論叢』第14号, 99-128, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子 (2011) 「2008年度～2010年度CASEC結果の総括と共通英語教育」, 『十文字学園女子大学社会情報学部論叢』第15号, 23-55, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子 (2012) 「2011年度外国語選択状況とCASEC結果報告」, 『十文字学園女子大学人間生活学部紀要第』10巻, 199-211, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美・島村豊博 (2013) 「2012年度外国語選択状況とCASEC結果報告」, 『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』第11巻, 177-189, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美・島村豊博 (2015) 「英語習熟度の経年比較：2015年の結果の考察」, 『十文字学園女子大学研究紀要』第46集, 127～137, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美 (2016) 「英語習熟度の2015年度内比較」, 『十文字学園女子大学研究紀要』第47集, 179～190, 十文字学園女子大学.
- CASEC ホームページ, <http://casec.evidus.com/> (2021.9.5)
- 株式会社ウエストゲイト (2020) 「コミュニケーション演習」「英語コミュニケーション応用」報告書.